

平成 30 年 6 月 6 日現在

機関番号：15501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26381145

研究課題名(和文)人文科学系学士課程教育における卒業論文の意義 - 社会的レリバンスの質保証 -

研究課題名(英文)Significance of graduation thesis in undergraduate education in Humanities Departments - Quality assurance of social relevance -

研究代表者

篠田 雅人 (Shinoda, Masato)

山口大学・大学教育機構・助教(特命)

研究者番号：60601234

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：「卒業論文は人文科学系学士課程教育カリキュラムの集大成であり、その執筆経験は卒業後の社会生活に影響をもたらしている」ことを検証すべく、実社会とのレリバンスが比較的弱いとされている哲学・史学・日本文学系の卒業生を対象とした質問紙調査を実施した。その結果、高校・大学での学びは卒業論文を執筆する上での意識を高めていること、また、卒業論文の執筆経験は、大学時代や現在身につけている知識・能力にもプラスの影響を与えていることが判明した。加えて、「人生を豊かにする」という複数の自由記述に代表されるように、人文科学系の学問は、「役に立たない」のではなく、「広義の社会的レリバンス」を担保していると考えられる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to verify that writing graduation thesis is a core and central curriculum of undergraduate education and the experience has a positive effect on social life after graduation. For this purpose, we conducted a survey for graduates of philosophy, historical studies and Japanese literature. These three disciplines are often said to have low relevance to the real society after graduation. As a result, we found that learning at high school and university had raised the motivation of writing a graduation thesis higher and that writing experience of graduation thesis had a positive influence to the knowledge and ability acquired during university and those at present. In addition, as mentioned in free comments by multiple respondents, learning humanities “enrich life”. Humanities are not “useless” but have “social relevance in a broader sense”.

研究分野：高等教育論

キーワード：人文科学系 学士課程教育 卒業論文 レリバンス 質問紙調査

1. 研究開始当初の背景

近年、「大学教育の質保証」についての議論が盛んだ。活発な議論が行われるきっかけとなったのが、2008年の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」(以下、「学士課程答申」)である。「学士課程答申」では、大学設置基準大綱化後、「人文系、社会系などの学部は、基礎教育や自由選択の比重が高いこともあって、専門教育の学際化が進んでいる」一方で、「学士課程の学生の約半数を占める人文・社会系の学科での教育課程の体系化・構造化に向けた取組が十分でない」とも指摘されている。また、日本学術会議の「大学教育の分野別質保証の在り方について」という回答の中には、「学生が職業生活に移行する際に、とりわけ文系の分野を中心に、大学教育の成果が殆ど顧みられない」と指摘されるとともに、分野別参照基準の策定が順次進められている。さらに、2012年の中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」では、「就職面接等で企業から卒業論文の内容等についてほとんど聞かれたことがなく、大学での学修が社会で生きるという意識が芽生えないという学生からの指摘もあった」とあるように、企業をはじめとする実社会と大学教育の関係性について、学生自身も疑問を抱いていることが指摘されている。これらの指摘が共通して問題としているのは、学士課程教育と就職を主とする「社会とのレリバンス」である。社会とのレリバンスについての先行研究としては、大学時代における学習習慣と現在の所得に着目した理工系学科(例えば矢野(2005)等)、経済系学科(濱中(2012))についてはあるものの、人文科学系学科については総じて少ないのが現状である。

このような問題意識のもと、2011～2013年度にかけて、学習院大学人文科学研究共同研究プロジェクト「人文系学士課程教育における卒業論文がもたらす学習効果の検証」(研究代表者：学習院大学文学部日本語日本文学科・神田龍身教授)では、人文科学系学科の「卒業論文」に焦点を当てた研究を推進してきたところである。「卒業論文」を焦点化した理由は、「学士課程答申」に言うところの「順次性のある体系的な教育課程の編成」と「学士課程教育のプログラム化」という繋がりを象徴する「卒業論文」の作成や、それに至る様々な教育・学習過程が「大学教育の質保証」問題を解決させるひとつの材料足りうるのではないかと考えたからである。そこで、プロジェクトでは、卒業論文(卒業研究を含む)の設置状況や指導のあり方の実態を明らかにするために全国の人文科学系学科長を対象とした機関調査(2011年度)これまでの学生生活や卒業論文・卒業研究への取り組みを振り返るために、学習院大学文学部4年生のうち卒業論文・卒業研究を提出した卒業予定者を対象とした在学調査(2011年度)、卒業後一定年数を経過して

もなお学部生時代の教育成果・学習経験、卒業論文・卒業研究への取り組み方等が現在の社会生活に生かされていることを確認するために、学習院大学文学部卒業後満7～13年を経過した卒業生を対象とした卒業生調査(2012年度)の3つの質問紙調査を実施した。機関調査では、学生の学力低下や教員の多忙化といった理由から、必修から選択制に移行、あるいは科目設置そのものを廃止する学科も一部にはあるものの、有効回答の実に70%を超える学科で卒業論文が必修となっていることが明らかとなった。また、学科長の自由記述回答では、「卒業論文は学士課程教育の集大成である」という意見が多く、卒業論文が人文科学系学科のカリキュラム上重要な要素と位置付けられていることが再確認された。一方、在学生調査からは、卒業論文提出直後の回答のため、回答者の高揚感を考慮する必要はあるものの、教育・学習成果をより高めるためには、卒業論文への取り組みを一層高めること、また、卒業論文執筆に着手する前の学習を効果的に促すことの両方を実践することが有効である(谷村(2013))という示唆が得られている。さらに、卒業生調査の回答では、「卒業後の社会生活においても、卒業論文を仕上げたという経験そのものは非常に貴重な経験だった」という意見が多かった。

2. 研究の目的

人文科学系学科の教育・学習成果について検証を試みた前述の学習院大学調査により、カリキュラムとしての「卒業論文の重要性」と卒業論文執筆による「学生の成長感」が確認された。そこで、本研究では、人文科学系学士課程教育のカリキュラムの順次性に着目したうえで、その集大成である卒業論文執筆前後における学生の成長感の規定要因を明らかにするとともに、学士課程教育における教育成果・学習経験と卒業後における社会とのレリバンスを検証することを目的とする。

これにより、「大学教育は役に立たない」という言説の中でも特に風当たりの強い人文科学系学士課程教育について、知識・能力の修得という観点から教育成果・学習経験が有効に機能していることを示し、人文科学系学士課程教育の質保証論議に資することを目指すものである。

3. 研究の方法

先行研究である3つの学習院大学調査の分析結果を踏まえながら、本研究では、「学生の成長感」と「社会とのレリバンス」を検証するため、当初「3年生調査」・「4年生調査」のパネル調査と、「卒業生調査」の計3種類の質問紙調査を実施することとした。しかし、諸般の事情により、質問紙調査の実施が2017年度にずれ込んでしまったため、「卒業生調査」と「卒業時調査」の2種

類の質問紙調査を実施することとした。実施概要は以下のとおりである。

「卒業生調査」

対象：人文科学系の学科のうち、哲学、歴史学、日本文学・文化系の学科を卒業した方のうち、2018年11月時点で学部卒業満5～10年程度の経過者

実施時期：2017年11～12月

方法：Web調査（インターネットモニター調査）

質問項目：卒業大学・学部名、入試方法、高校での学習習慣、大学での学習習慣、大学での課外活動、卒業論文・卒業研究の執筆経験・留意点、大学生活の満足度、大学時代に身につけた知識・能力、卒業直後・現在の職業、現在の仕事に関すること、現在身につけている知識・能力、現在の私生活上の意識・価値観等

回収数：1,236

「卒業時調査」

対象：人文科学系の学科のうち、哲学、歴史学、日本文学・文化系の学科を2018年3月の卒業決定者

協力大学・学部数：2大学2学部

実施時期：2018年2～3月

方法：Web調査

質問項目：入試方法、高校での学習習慣、大学での学習習慣、大学での課外活動、大学時代に身につけた知識・能力、卒業論文・卒業研究の執筆経験・留意点、就職活動、卒業後の進路、大学生活の満足度等

回収数：27

4. 研究成果

「卒業生調査」

実社会とのレリバンスが比較的弱いとされている哲学・史学・日本文学系の卒業生を対象とした質問紙調査を行った。卒業論文は人文科学系学士課程教育カリキュラムの集大成という観点から、「高校・大学での学びが卒業論文執筆に与えた影響」「大学時代に身につけた知識・能力に卒業論文執筆経験が与えた影響」「現在身につけている知識・能力に卒業論文執筆経験が与えた影響」の3つの分析を行った。

(1) 高校・大学での学びが卒業論文執筆に与えた影響

卒業論文に求められる、問題設定の適切性や独創性等を合成した変数「卒業論文執筆時の意識」を従属変数とし、高校や大学での学習習慣等を説明変数とした重回帰分析を行った結果、5%水準で有意にプラスに寄与していたのは、以下の変数であった。

- ・高校 - 文章を書くことが得意だった
- ・大学 - 授業をきっかけにして自分の関心を形成していった
- ・大学 - 学術論文・書籍や文学作品を積極

的に読んだ

- ・大学4年生時の1週間あたり学習時間（が多い）
- ・卒業論文のテーマを納得いくまで考えたり調べたりした
- ・卒業論文執筆に真剣に取り組んだ

この結果から、高校までの学習習慣に加え、大学における学習習慣がしっかり身につけていた学生は、教育の集大成としての卒業論文をしっかりと意識して執筆したと言える。

(2) 大学時代に身につけた知識・能力に卒業論文執筆経験が与えた影響

次に、「大学時代に身につけた知識・能力」（合成変数）を従属変数とし、高校や大学での学習習慣等を説明変数とした重回帰分析を行った結果、5%水準で有意にプラスに寄与していたのは、以下の変数であった。

- ・高校 - 授業で分からなかったところは自分で考えたり調べたりした
- ・高校 - 文章を書くことが得意だった
- ・強く志望していた学科に入学した
- ・大学 - 授業内容が自分なりに理解できるまで考えたり調べたりした

・大学 - 学術論文・書籍や文学作品を積極的に読んだ

・大学3年生時の1週間あたり学習時間（が多い）

・大学 - 資格や検定のための勉強（に意欲的だった）

・大学 - アルバイト（に意欲的だった）

・大学 - 部活動・サークル活動（に意欲的だった）

・卒業論文執筆時の意識（が高かったこと）

これらの変数のうち、最も高く寄与していたものは「卒業論文執筆時の意識」であった。卒業論文が人文科学系学士課程教育カリキュラムの集大成であることを確認することができる結果となった。

(3) 現在身につけている知識・能力に与えている影響

「現在身につけている知識・能力」（合成変数）を従属変数とし、大学時代に身につけた知識・能力、現在の仕事の状況や役に立っている大学での学習経験等を説明変数とした重回帰分析を行った結果、5%水準で有意にプラスに寄与していたのは、以下の変数であった。

- ・大学時代に身につけた知識・能力
- ・仕事においてよい成果をあげている
- ・職場で良好な人間関係を築いている
- ・仕事に関する知識を十分身につけている
- ・卒業論文に取り組んだ経験が役立っている
- ・専門分野以外の大学での学びが役立っている
- ・仕事に関連した学習を職場以外でも行っている

大学卒業後の様々な社会経験による積み

増しはもちろんあると考えられるが、現在身についている知識・能力に対しては、大学時代に身についた知識・能力が最も大きく寄与しており、卒業論文の執筆経験そのものも役立ち感が認められる結果となった。

以上の結果から、高校までの学習習慣が大学教育における学びに寄与し、さらには大学卒業後の社会生活にも繋がっていることが明らかになった。加えて、人文科学系学士課程教育の集大成である卒業論文の執筆経験は、現在身についている知識・能力の形成にも少なからず寄与しており、「人文科学は役に立たない」という言説に対する反証材料になると言えるだろう。加えて、「人生を豊かにする」という複数の自由記述に代表されるように、人文科学系の学問そのものは、「広義の社会的レリバンス」を担保していると考えるのが妥当であろう。

これらの結果は、一事例ではあるものの先行研究である学習院大学調査の結果と多くの点で合致するものであり、人文科学系学士課程教育の質保証議論に資するものと言えるだろう。

「卒業時調査」

調査協力大学・学部がなかなか得ることができなかったこともあり、目標としていたサンプル数に全く届かないという結果となってしまった。そのため、本研究としては分析対象から除外することとした。今後の研究への反省材料としたい。

なお、補助期間内における研究成果の公表ができなかったため、2018年度以降に調査データの分析を進め、結果がまとまり次第、学会・論文等にて発表していく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

篠田 雅人 (SHINODA, Masato)
山口大学・大学教育機構・助教(特命)
研究者番号：60601234

(2) 研究分担者

佐藤 学 (SATO, Manabu)
学習院大学・文学部・教授
研究者番号：70135424

小島 和男 (KOJIMA, Kazuo)

学習院大学・文学部・准教授
研究者番号：80383545

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

日下田 岳史 (HIGETA, Takeshi)
谷村 英洋 (TANIMURA, Hidehiro)
中世古 貴彦 (NAKASEKO, Takahiko)